



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宗教の非合理性とその問題について : スピリチュアルケアを事例として
Author(s)	宮嶋, 俊一; Miyajima, Shunichi
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 177, 1 (左) -7 (左)
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.177.11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98608
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_177_Miyajima.pdf



宗教の非合理性とその問題について —— スピリチュアルケアを事例として ——

宮 嶋 俊 一

はじめに

宗教と社会の関わりについて考察する場合に問題となるのは、宗教の非合理的な要素であると考えられる。よって、本稿では合理性・非合理性という観点から、宗教と社会の関わりについて、主にスピリチュアルケアを事例として考察を行いたい。

なお、ここで言う合理性（非合理性）とはヴェーバーの言う目的合理性のことではなく、科学的・論理的な意味での合理性・非合理性のことである。また、本稿の議論では、「合理的であるとはどういうことか」という原理論的な問題には踏み込まない。

宗教の非合理性

宗教（思想）の中には非合理的とされる要素が少なからず存在する。とりわけ、20世紀前半の宗教学者は、宗教の非合理的側面を強調した。例えば、ドイツの神学者・宗教学者であるルドルフ・オットーは代表作である『聖なるもの』において、非合理的な要素が宗教の本質であると考え、宗教から合理的な要素を取り除き、そこに残された非合理的なものをヌミノーズと名付けた¹。また、フリードリヒ・ハイラーは主著である『祈り』において、「祈り」の合理的な理解を批判し、近代科学と対峙する姿勢を示した²。このよう

に宗教を非合理的なものと捉えたのは彼らだけではない。この考え方は、主として宗教現象学派と呼ばれる研究者に共有され、20 世紀前半の宗教研究の主流となったとすら言える。

合理的な宗教の探究

だが、第二次世界大戦後、それまで以上に、世俗化論が盛んに論じられるようになる。そして、非科学的・非合理的な宗教は衰退するか、私事化すると考えられた（この主張は、とてもラフなスケッチである）。他方、宗教の合理的な側面も重視されるようになった。宗教を私的で神秘的な活動としてではなく、むしろ公共的な活動と捉える傾向も生じた。

例えば、宗教学者である岸本英夫は宗教から非合理的な要素を取り除き、合理的な宗教のあり方を模索した。岸本は近代人として、死後世界の存在など、伝統的な宗教思想を受け入れることができなかった。だが、宗教そのものを否定することもなかった。そして、ジョン・デューイの「誰でも信仰」や自由宗教運動の影響を受けながら、「よく生きること」を理想とする独自の宗教思想を説いた。それは、岸本の教え子から「岸本教」と呼ばれるものであった³。

同じ宗教研究者でありながら、宗教から合理的な要素を取り除いて宗教の本質を非合理的なものと考えたルドルフ・オットーと、宗教から非合理的な要素を取り除いて合理的な宗教を模索した岸本英夫は、まさに対極である。その違いは、両者の宗教観の違いから説明することもできるが、第二次世界大戦前と後という時代の差もまた重要である。

¹ Otto, Rudolf, *Das Heilige — Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, Trewendt & Granier, Breslau, 1917.

² Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine Religionsgeschichtliche und Religionspsychologische Untersuchung*, Reinhardt, München, 1918 (5.Aufl. 1923).

³ 宮嶋俊一「岸本英夫の死生観と宗教観」『死生学年報 2025 葬送の墓制と現在』東洋英和女学院大学死生学研究所編集、2025 年、149-170 頁。

一方で、第二次世界大戦後、宗教学における宗教の認識が変化した。20世紀前半に盛んであった宗教現象学的研究の潮流は、戦後、徐々に衰退し、エリアーデ以降、宗教の非合理性を強調する研究は主流ではなくなっていった。

他方、宗教の側も、より社会的な発言を強めていく。例えば、70年代以降のイスラームの台頭やアメリカにおける福音派の影響力の強まりなど、それぞれの宗教的な思想に基づいて、社会に向けた積極的な発言を行う団体が存在する。だが、日本のような世俗化が進んだ国では、宗教がより合理的なものと考えられるようになったことと、宗教が私的な行動ではなく公共的な活動であると考えられるようになったことは、パラレルな現象であると考えられる。なぜなら、現代において、宗教が公共的な役割を果たす場合でも、その活動が合理的であれば社会とのコンフリクトはあまり発生しないからである。

災害ボランティアとスピリチュアルケア

被災地における災害支援のボランティアなどはその一例である。日本では地震や台風などの自然災害が起こると、多くの宗教団体がボランティア活動を行うが、こうした活動に対する批判はあまり起こらない。それは、その活動が合理的なものだからである。

ただし、微妙な例も存在する。宗教者が災害や事故、病気で亡くなった人たちの遺族の精神的なケアを行う場合がそれにあたる。そのようなケアは、特定の宗教伝統の活動を超えた「スピリチュアル」なケアとされている。また、傾聴を重視し、宣教活動は行わないとされている。

だが、このスピリチュアルケアは、心理学者によるカウンセリングと比較して、より非合理的な要素を含むと考えられる。例えば、ケアをする人とケアを受ける人との会話の中には、死後の世界や霊魂に関わる内容も含まれる。そして、そのような非合理的な要素を含んだ活動は社会とのコンフリクトを生む可能性がある。

スピリチュアルケア

例えば、病院での活動を考えてみよう。一方で、近代医療は様々な問題を抱えていて、その限界も指摘されている。もちろん近代医療そのものが全面的に否定されることはあり得ない。だが、近代医療がすべて正しい、ということにもならないだろう。例えば、終末期医療における延命治療にはさまざまな考え方があある。余命宣告を受けて、避けがたい苦しみを抱えている人に対して、無理な延命治療を行うことでその苦しみを引き延ばすよりは、自然な死を迎えられるようにしてあげるべきだ、という考え方も存在する。そうした場合、痛みを取り除くための緩和ケアが重要となるが、その中には、精神的なケアに加えて、スピリチュアルなケアが意味を持つ、という考え方もある。

「自分は死んだら、どうなるのか」という患者の問いに、医師や看護師は容易く答えることができない。欧米であれば、キリスト教のチャプレンがそうした問いに向き合うであろう。だが、日本にはキリスト教が根付いておらず、チャプレンの制度も普及していない。それゆえ、スピリチュアルケアを担う、日本版チャプレンとして構想されたのが、臨床宗教師である⁴。教育とトレーニングを受けて資格を獲得した臨床宗教師は、特定の宗教の立場からではなく、臨床宗教師の立場から死にゆく者に向き合い、スピリチュアルなケアを行うとされる。

だが、そうしたケアが非合理的・非科学的なものであると判断されてしまえば、それは問題を生む。欧米のキリスト教圏におけるチャプレンの活動は、キリスト教の伝統の中で形成されたものであり、その内容が具体的に規定されているだけでなく、チャプレンによるケアを受ける側にもその心構えができていてる。そうした前提のない日本の医療の場において、非合理的な宗教活動を行うことは難しい。このように考えてくると、医療機関における「スピ

⁴ 藤山みどり『臨床宗教師』高文研、2020年。

リチュアルケア」もまた、合理性を確保することが課題となる。

宗教が抱えるジレンマ

ただし、宗教がただ合理的な存在となってしまうのは、宗教的な活動と世俗的な活動との違いがなくなってしまう。そうすると、宗教の存在意義は失われてしまう。例えば、前述の「スピリチュアルケア」が心理的・精神的ケアと変わらないものとなってしまうのは、あえて「スピリチュアル」と名付ける必要はない。臨床心理士や公認心理士の資格を持ったカウンセラーが患者の苦しみに向き合えばよいということになれば、臨床宗教師の活動も不要となる。

よって、社会から受け入れられやすい世俗的な活動であると同時に、宗教にしかできない活動を模索することが、臨床宗教師には求められている。これは大変困難な課題である。

合理的・非合理的という判断を誰がするのか？

ここまで、スピリチュアルケアを例にして、現代において宗教的な、あるいはスピリチュアルな活動が社会において認められるためには、合理的であることが必要であることを述べてきた。だが、ここでさらなる問題が存在する。それは、合理的か非合理的かの判断を誰がするのか、という問題である。これは、これまで述べてきた事柄に対して、より根本的な問題である。

従来、その役割を担ったのはアカデミズムであった。人文科学、社会科学、そして自然科学に従事する数多くの研究者がアカデミアに所属し、社会に向けて研究成果を発信してきた。それによって社会の中で一定のコンセンサスが形成され、そのコンセンサスが合理的・非合理的を判断するための基準ともなってきた。

だが、近年、そのような体制が崩れてきた。例えば、SNSの普及によって、たとえ科学的な信憑性が十分に得られなくても、声の大きな人の発言が真実

とされてしまう傾向が生まれている。SNS では、科学的な合理性を欠いた陰謀論が大きな影響論を持ちつつある。ドナルド・トランプによって有名になった「フェイク・ニュース」という言葉は象徴的である。さらに、AI によって、悪意を持った画像がたやすく作成できるようになったこともこうした問題の一因である。このような現代社会において、合理的・非合理的の判断はますます難しくなっている。

かつて、ピーター・バーガーは、近代社会では宗教的な「聖なる天蓋」が失われたと論じた⁵。しかしその後の社会においては科学的な合理性が「聖なる天蓋」を構築していたと言えるだろう。誰もが、科学的合理性という「天蓋」の下で合意を形成していたのである。だが、現代においては、この科学的合理性という「俗なる天蓋」もまた失われつつある。何を持って合理的と考えるか、その軸そのものが揺らいでいるのが現代社会である。

これまでは、宗教的な活動の非合理性に対し、社会の側が「非科学的である」という批判を加えることがあったが、その社会の側そのものに「非科学的」な価値観が充満したとき、社会の混乱はますます深まる。アカデミーに属する私たち研究者は、合理的・論理的な合意形成に向けた努力の必要性を社会に向けて説きつつ、非合理的な要素を含んだ宗教の研究に向かう必要があるだろう⁶。

* 本稿は The 7th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion（高麗大学校，2025 年 7 月 19 日）での発表原稿（“The Irrationality of Religion and Its Significance in Modern Times”）を基にしている。また、本研究は JSPS 科研費 23K01789, 24K03391, 24K00010 の助成を受けている。

⁵ Berger, L. Peter, *The Sacred Canopy. Elements of a Sociological Theory of Religion*, Doubleday, NY, 1969.

⁶ Ambasciano, Leonardo, *An Unnatural History of Religions-Academia, Post-truth and the Quest for Scientific Knowledge*, Bloomsbury Academic, 2018.

参考文献

- Ambasciano, Leonardo, *An Unnatural History of Religions-Academia, Post-truth and the Quest for Scientific Knowledge*, Bloomsbury Academic, 2018.
- Berger, L. Peter, *The Sacred Canopy*. Elements of a Sociological Theory of Religion, Doubleday, NY, 1969.
- 藤山みどり『臨床宗教師』高文研，2020 年。
- Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine Religionsgeschichtliche und Religionspsychologische Untersuchung*, Reinhardt, München, 1918 (5.Aufl. 1923).
- Otto, Rudolf, *Das Heilige — Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, Trewendt & Granier, Breslau, 1917.
- 宮嶋俊一「岸本英夫の死生観と宗教観」『死生学年報 2025 葬送の墓制と現在』東洋英和女学院大学死生学研究所編集，2025 年，149-170 頁。